

P3-34-5 凍結融解胚移植周期における妊娠成立に関する予後因子の検討

山形大

長谷川歩美, 高橋俊文, 松尾幸城, 網田光善, 五十嵐秀樹, 倉智博久

【目的】現在の日本における生殖補助医療(ART)の大きな特徴は、凍結融解胚移植による治療周期数が最も多く妊娠率が高いという点である。今回、凍結融解胚移植周期における妊娠成立に関する予後因子について後方視的に検討した。【方法】対象は2008年3月から2013年7月までに凍結融解胚移植を行った患者108名(187周期)。本研究は倫理委員会の承認を得た。体外受精または顕微授精にて得られた受精卵をガラス化法にて凍結。融解胚移植は自然排卵周期またはホルモン補充周期にて行った。妊娠群と非妊娠群について、年齢、経妊回数、不妊期間、ART治療回数、選択凍結の有無、凍結時の胚のステージ、融解後の胚のダメージの有無、融解後の胚発育の有無、胚移植時の胚のステージ、胚移植数、子宮内膜厚について単変量および多変量解析を行った。【成績】妊娠は47例(対胚移植33.6%)で、異所性妊娠はなく7例が流産となった(対妊娠14.9%)。単変量解析の結果、年齢、ART治療回数、融解後の胚のダメージの有無、融解後の胚発育の有無について、妊娠群と非妊娠群の間に有意差($P<0.05$)を認めた。多変量解析の結果、6回以上のART治療回数(妊娠成立のオッズ比(OR)0.76, 95%信頼区間(CI)0.59-0.98, $P=0.04$)、融解後の胚のダメージがないこと(OR6.80, 95%CI1.93-24.00, $P=0.003$)、融解後の胚発育があること(OR3.71, 95%CI1.26-11.50, $P=0.02$)が妊娠成立の独立した予後因子であることがわかった。【結論】凍結融解胚移植周期における妊娠成立について、ART治療回数が少ないこと、融解後の胚のダメージがなく胚発育があることが予後良好因子となることが示唆された。

P3-34-6 採卵後6日目に凍結した胚盤胞を用いた融解胚移植の治療成績

琉球大

平敷千晶, 銘苅桂子, 下地裕子, 屋良奈七, 安里こずえ, 青木陽一

【目的】新鮮胚移植においては採卵後5日目の胚盤胞移植に比較し、6日目に胚盤胞となった発育遅延胚の妊娠率は低いことが報告されている。6日目に胚盤胞到達した胚を凍結保存し、その後融解胚移植を行うことで治療成績を向上させることができるか検討した。【方法】2011年1月から2013年7月の期間、当科において採卵後5日目に凍結した胚をD-5 cryo群(78周期)、6日目に凍結保存した群をD-6 cryo群(19周期)とし、両群の治療成績を比較した。融解胚移植はホルモン補充周期で行い、Day-5 cryo群、Day-6 cryo群の胚盤胞はどちらも黄体ホルモン投与開始後6日目に移植した。Gardner分類3BB以上を良好胚と判断し、子宮内胎嚢を認めたものを臨床的妊娠、妊娠12週以降継続したものを継続妊娠と診断した。【成績】移植時年齢(37.4歳 vs. 37.9歳)、融解胚数(2 ± 1.0 個 vs. 2 ± 0.5 個)、移植前子宮内膜厚(11.1 ± 2.1 mm vs. 10.9 ± 1.7 mm)、移植胚数(1 ± 0.5 個 vs. 2 ± 0.6 個)、移植胚中良好胚数(0 ± 0.7 個 vs. 0 ± 0.6 個)において両群間に有意差は認めなかった。臨床的妊娠率(39.7% vs. 31.6%)、着床率(49.7% vs. 46%)、継続妊娠率(32.1% vs. 15.8%)は両群で同等の成績であったが、流産率はDay-6 cryo群で高い傾向を認めた(16.1% vs. 50%)。【結論】採卵後6日目で胚盤胞に到達した発育遅延胚でも、凍結後子宮内膜を調整することにより採卵後5日目に胚盤胞に到達した胚と同等の臨床的妊娠率と着床率を得られることが示唆された。さらに症例を集積し6日目凍結胚では流産率が上昇するリスクがあるか検討が必要である。

P3-34-7 凍結融解胚移植時の子宮内膜の厚さが児の出生体重に及ぼす影響

虎の門病院

東梅久子, 三宅友子, 白根 晃, 田中誠治, 高本真弥, 山口 隆, 横尾郁子, 北川浩明

【目的】凍結融解胚移植によって妊娠・分娩した児の出生体重は新鮮胚移植より重いことが指摘されているものの原因は明らかでない。凍結融解胚移植時の子宮内膜の厚さと児の出生体重との関連について検討した。【方法】過去10年間に当科で凍結融解胚移植にて出生した児のうち、母体に合併症、分娩歴がなく妊娠37週以降に出生し児に異常のない単胎31例を対象とし、新鮮胚移植にて出生した65例と移植時の子宮内膜の厚さ、出生体重、在胎期間別出生時体格標準値を比較検討した。体外受精・胚移植および凍結融解胚移植の実施にあたっては院内の倫理委員会の承認を得たうえで、文書による説明と同意を得た。【成績】1) 出生体重は凍結群 $3,176\pm 358$ g, 新鮮群 $2,893\pm 516$ g, 出生時体格標準値は凍結群 $68.1\pm 24\%$ tile, 新鮮群 $53.0\pm 28\%$ tileであり、凍結群において有意に大きかった。2) 移植時の子宮内膜の厚さは凍結群 9.5 ± 2 mm, 新鮮群 9.7 ± 2 mmであり有意差はなかった。3) 出生体重は凍結群でSGAはなく、LGA6例(19%)、新鮮群ではSGA6例(9%)、LGA6例(9%)で、いずれも内膜の厚さとの関連はなかった。4) 内膜の厚さと児の出生時体格標準値をみると凍結群では内膜の厚さが10mm未満では $62.0\pm 23\%$ tile, 10mm以上では $74.3\pm 22\%$ tile, 新鮮群では内膜の厚さが10mm未満では $47.5\pm 27\%$ tile, 10mm以上では $60.8\pm 29\%$ tileであり、内膜の厚さが10mm以上では新鮮群より凍結群で出生時体格標準値が大きい傾向がみられた。【結論】凍結融解胚移植時の子宮内膜が10mm以上の群において出生時体格標準値が大きい傾向がみられることから、移植時の子宮内膜の厚さが凍結融解胚移植にて出生した児の体重と関連している可能性が示唆された。